



学園花の村機関紙第83号

2015年2月3日(火)

編集兼発行人 松井道夫

TEL

(0537) 24-0101

Fax

24-0242

蜜柑園の白い紙テントの精神風土

— 命の安売りは農業だけではない —

津野 幸人

松山市から南へ道後平野をよぎると、四国山地の麓に展開するミカン園地帯に至る。幼年時代の私は、晩春から初夏にかけて真っ白いテント群が蜜柑山に出現するのを美しい風景として眺めていた。

小学一年生のときだと記憶する。蜜柑農家の若い母親が樹に被せた紙テントを取り外しているとき、「アッ、桃の匂いがする」と、一言いつて急死したことを級友から聞かされた。この時、はじめて蜜柑山の白い紙テントが、カイガラムシなどの強力な害虫を殺すための「青酸ガスクン蒸」という命がけの農作業であることを知った。

その作業の内容はこうだ。まず、ミカン樹を和紙製の丈夫な紙袋ですっぽりと覆って気密に保つ。この中で、水を入れた鉢に濃硫酸、青化

ソーダ、の順に加えていくと猛毒の白い青酸ガスが噴出する。ガスの拡散を促すために作業者は団扇であおぐ。この間、どんなに苦しくても呼吸を止めていなくてはならない。一口吸うと即死である。息が続かなくなる寸前に、テントの外に這い出る。世界にも例をみないこの命がけの労働は、大正時代から大戦後まで続き、やがて水田害虫を駆除する猛毒有機リン剤（ホリドール）を果樹園に散布することで終焉をみたのである。

国際法によって化学兵器として使用を禁止されている青酸ガスを、果樹園の害虫防除に使用するという乱暴な農業技術の発祥地はどうやらカリフォルニア州らしい。ともあれ、明治維新後にアメリカより多くの新しい園芸作物が導入され、その栽培はわが東アジア農民の特技である集約農法によって精密化された。

やがて、農産物市場の発展に伴って異常なまでに外観にこだわる園芸産品の出荷が生産者に要請されるようになった。市場業者がこだわるのは、食の安全よりも見てくれのよさであって、これが農産物の格付け基準となるのだ。このハ

ードルを超すために農家は自らの健康を犠牲にして農薬散布をおこなう。殊に密閉されたハウス栽培では、農薬散布回数が多いので事態は深刻だ。この現状を脱皮しない限り、農業後継者の確保は難しいだろう。青酸ガスクン蒸でみたおり、貧困からの脱出のためには、生命をも粗末にするという精神風土が、若者の魅力をそぐのである。

平坦地の少ない四国では、食糧自給のために農民は山腹、山麓に階段状の小区画農地を構築した。ここから生活費を稼いだすためには、換金作物の導入が不可欠である。桑（養蚕）、除虫菊、桃、柑橘などの導入が試みられた。このなかで日本在来の温州蜜柑の栽培は比較的安定した収入を約束してくれたので、これに命がけの農業技術が投入されたとしても不思議ではないのである。また、それが農民にとっては貧困との戦いそのものであった。

二宮尊徳の時代の農民は、勤勉を武器とすれば衣食住は自給できた。現代の貧困は、貨幣経済の下でのそれで、金の無いのは首の無いのと等しい。いまや、わが国では農村の貧困と都市の貧困との同時進行が起こっている。都市では、不正規雇用の増加、超過勤務の強制、さらには、教育費の高騰などその一例だ。やはり、資本主義は改革しなければならぬのではなからうか。